2022 WINTER

ダルニー通信

vol.91

特集

民際センター設立35周年記念号

2p… 35周年を迎えて～理事長より挨拶～
3p… 各国所長からの挨拶
4~5p… ヒストリータイムライン
6~7p… 親から子へ繋がる支援～山梨英和中学校・高等学校～
8~10p… 長年の支援者様からのメッセージ
11p… トンチャイ博士からのメッセージ

35周年を迎えて

「国際」でなく「民際」と命名した私たちの団体は、昭和生まれで、平成で育ち、令和4年の今年、人で例えれば、働き盛りの35歳になりました。これからが、国でなく世界の「民」と「民」が手を携え、大きく羽ばたく時代の到来だと夢を描く次第です。

設立以来、37,000名以上の支援者の方々に、メコン5ケ国の教育支援運動にご参加いただきました。また、書き損じはがきによる支援は学校法人が約2,000校、企業・団体のご支援が2,500社に及びました。

35年という歴史の中で故人となられた支援者も多く、遺贈で奨学金や学校建設等のご寄付もあり、各国の教育の発展に寄与されています。これらの支援は奨学生の人生、当該国の教育の発展に大きな変化をもたらしたことは言うまでもありません。心より深く感謝申し上げます。

また、この35年間、日本のみならず、各国の学校の数千名に上るダルニー奨学金担当教官、教育委員会の方々、ボランティア及び事業所スタッフなど多くの方がその時代に働き、去りましたが、バトンを次世代に繋げることができました。これらの方々がいてこそ、今日のEDFグループがあり、深く感謝する次第です。

発足当時は、未だ東西冷戦時代で、タイの経済発展も緒についた頃であり、貧富の格差が著しく、中学進学率が東北地方では20％余りでした。ベトナム戦争後、メコン5ケ国では、際立った国際紛争もなく、平和が幸いし、急激な経済発展、目覚ましい社会変革が進みました。教育の機会を得た奨学生たちは、社会変革に対応できる資質を習得することができ、ダルニー奨学金の目的の一つである貧困削減に一定の貢献ができたと言えるのではないでしょうか。

手紙から始まった各国とのやり取りも、FAXの時代を経てメール、オンライン会議もできるようになり、ICT化が進み、郵送での奨学生証書の送付も近い将来、終焉となるでしょう。AI（人工知能）の発展で、言葉の壁も低くなり、支援者と奨学生の関係も近い将来変化するかもしれません。オンラインでの対面も可能な時代になりつつあり、支援関係からさらに心が通う交流が生まれる環境が整いつつあると言えましょう。ですが、その一方、残念ながら冷戦後も絶え間なく紛争と戦争が続きます。本来なら、人類一丸となって地球温暖化に伴う自然災害などを含む持続可能な開発目標に、立ち向かうべきと思います。もしダルニー奨学金運動が世界に広がり、一人の次世代の子どもの教育里親になったことを契機とし、世界の一市民と一市民が交流を行い、手を携えることができれば、これこそ平和構築運動となり、平和の実現に貢献できるのではないかと夢見る次第です。次の35年の道しるべになればと思い、理想を描いて文章を終えます。

35年間、誠にありがとうございました。これからの35年もよろしくお願いします。

理事長　秋尾晃正

各国所長からの挨拶

メコン5ヶ国にある、EDFの各国事業所。今回は、各事業所のトップである各所長から、民際センターが設立35周年を迎えることができたことへの、支援者様へ感謝のメッセージをご紹介いたします。

EDF-Thai（タイ事業所）所長
Sunphet Nilrat（サンペット・ニラット）

41名の子どもたちへの奨学金支援からはじまったダルニー奨学金。設立以来、延べ40万人を超える子どもたちに奨学金をご提供いただきました。皆様からの長きにわたるご支援により、子どもたちが勉強に専念することができ、夢を実現する機会をいただき、学んだ知識をもとに、多くの子どもたちが人生で成功し、家族を養うことができる職業に就き、国の発展に貢献しています。日本の支援者の皆様に支えられた35年の年月に感謝するとともに、両国の友好関係が末永く続くことを心から願っています。

EDF-Lao（ラオス事業所）所長
Khamhiane Inthava（カムヒアン・インタバ）

EDF-Laoのスタッフ、奨学生とその家族、学校関係者を代表して、民際センターの設立 35 周年をお祝い申し上げます。東南アジアの恵まれない子どもたちにとって、非常に尊い支援をしていただいている日本の支援者様に心から感謝いたします。すべての奨学生に連絡をすることは難しいことですが、それでも現在のラオスの発展に貢献している大勢の元奨学生たちを目の当たりにしています。今後とも、いただいたご支援を確実に子どもたちに届けられるように頑張りたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。

EDF-Cambodia(カンボジア事業所)所長
Chandy Cheng（チャンディ・チェン）

皆様の社会貢献活動への継続的なご支援に対し、心から感謝の意を表したいと思います。皆様からの崇高なご支援は、カンボジアの教育環境を強力かつ効果的に改善しました。就学率を上げ、中途退学を減らし、貧しく恵まれない家庭の子どもたちが教育を受ける機会をくださいました。女子寮や、給水設備やトイレ建設のご支援は、子どもたちの健康や公衆衛生環境を改善しました。EDF-Cambodiaの職員、カンボジアの人々を代表して、教育の発展に対する皆様の貴重なご支援に心から感謝申し上げます。皆様とご家族の健康と幸福をお祈り申し上げます。

EDF-Myanmar(ミャンマー事業所)所長
Zin Zaw Zaw Maung（ジン・ゾーゾー・マウン）

民際センター35周年おめでとうございます。ミャンマーでは2012年からダルニー奨学金がスタートし10年になりました。これまで多くの子どもたちがダルニー奨学金を受け無事中学を卒業しました。ミャンマーの子どもたちに代わって感謝を申し上げます。ミャンマーでは2020年からコロナ禍や政変により景気が悪くなっており、より多くの子どもたちが皆様のご支援を必要としています。未来を担う子どもたちが学校に通い教育を受けられるように、これからもご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

EDF-Vietnam(ベトナム事業所)所長
Nghiem Thi Cam Van（ニェーム・ティー・カム・バン）

民際センターとの出会いはちょうど20年前になります。バンコクで行われた設立15周年の記念イベントに参加した時でした。10年前には、ベトナム事業所の責任者として自国に支援の手を広げるお手伝いを始めました。現在、タイで生まれた長男が、大学の交換留学生としてバンコクに戻り、タイ事業所でインターンとして勉強させていただく予定になっています。私もかつて援助を必要とするようなアジアの貧しい子どもだったので、民際センターの活動に心から感謝するとともに、家族で民際センターに関われることに誇りを感じています。

ヒストリー タイムライン

MINSAI HISTORY

1987 任意団体として北海道民際交流センター設立、タイ事業所となる地域開発教育基金（ＥＤＦ）設立

ダルニーちゃんとの出会い

1988 日本民際交流センターに名称変更

1989 第１回奨学金提供、研修旅行開始

1980

WORLD HISTORY

1987 国鉄民営化、第６回在カンボジア ベトナム兵撤退

1988 青函トンネル、瀬戸大橋開通

1989 昭和天皇崩御、消費税導入、「ベルリンの壁」崩壊

1990 ニュースレター「ダルニー通信」創刊
朝日新聞掲載記事を通じて多くの支援

1991 タイ事業所ＥＤＦ財団化

1992 書き損じはがきキャンペーン開始

1993 タイの支援対象地域を 16 県に拡大

1995 ラオス政府が奨学金事業を認可

1996 ラオス事業所開設、ドナー（支援者）連絡会発足

1997 ラオス奨学金事業 小学校校舎建設事業開始

1990

1990 東西ドイツ統一、マンデラ氏釈放

1991 湾岸戦争、カンボジア和平会議、雲仙普賢岳噴火

1992 カンボジアＰＫＯ、地球サミット、国連ソマリア活動

1993 東京サミット、米不足外国産米緊急輸入

1995 地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災

1996 豊浜トンネル崩落、O157、狂牛病

1997 香港返還、拓銀倒産、山一証券廃業

2020 支援者専用 Web サイト「マイ・ページ」公開
カンボジア トイレ建設プロジェクト開始

2021 クラウドファンディングサイトリリース、ウォータープロジェクト開始

2020

2020 新型コロナウイルス世界各地に広がる

2021 ミャンマークーデター国軍掌握、原発処理水海洋放出決定

2022 ロシア軍ウクライナ侵攻

FUTURE ～未来～

1977 ROOTS ～原点～

1977年、南北海道に於いて、在日留学生の農家等への受け入れ、職業体験を通じた国際交流の草分けとなる活動中、偶然にも青函連絡船でタイの留学生との運命的な出会いによってタイ東北地方を訪問。貧困削減のための奨学金提供のきっかけとなる少女との巡り合い。

2000

- **2002** 新宿区早稲田鶴巻町へ事務所移転
  ラオスで保健衛生事業開始
- **2003** カンボジア奨学金パイロット事業開始
- **2005** スマトラ沖地震津波被災家族に支援活動
- **2007** カンボジア事業所開設
  奨学金正規事業化
- **2009** 一般財団法人民際センターとして法人化
  奨学生延べ 30 万人突破

- **2001** 米国同時多発テロ
- **2002** 米ロ首脳会談戦略核削減条約調印
- **2003** 宮城地震、郵政公社発足、
  地上波デジタル放送開始
- **2005** ロンドン同時テロ、福知山線事故、
  耐震計算偽造
- **2007** 新潟県中越沖地震、年金記録漏れ
- **2009** 事業仕分け、思いやり予算

2010

- **2010** 日本建築学会賞を共同受賞
- **2011** 新宿区山吹町へ事務所移転
- **2013** ミャンマー、ベトナム事業所開設、奨学金事業化
- **2014** 内閣府より公益財団法人として認定
- **2016** 「この子の未来を支えたい」
  ＡＣジャパン支援キャンペーン
- **2017** 創立 30 周年記念募金でホームページリニューアル
- **2018** 中央区日本橋本町へ事務所移転
  「感謝の会」開催

- **2010** 1 ドル 80 円台、歌舞伎座建替え休館
- **2011** 東日本大震災、福島原発、タイ洪水
- **2012** 日経平均 8,500 円割れ、普天間飛行場着陸オスプレイ
- **2013** 特定秘密保護法成立
- **2014** エボラ出血熱、ＳＴＡＰ細胞
- **2016** 熊本地震、オバマ米大統領広島訪問
- **2017** 香港民主派大規模デモ返還 20 年
- **2018** タイ少年洞窟 13 人全員救出、築地市場移転
- **2019** 新元号「令和」、消費税 10%スタート、首里城火災

先行き不透明な国際情勢が続く中、民際センターの理念とその目的の原点に立ち返れば、今、最も大切なことは平和構築です。紛争や環境問題に影響される子どもたちの将来、未来への不安に対して、あらためて平和構築のための教育支援が必要です。
私たちの役割はまだ終わりません。「こころ」を届ける気持ちは変わりません。国際協力、教育支援を通じた平和構築と貧困削減が求められています。

～35年の振り返りとこれから～

親から子へ繋がる支援
～山梨英和中学校・高等学校～

支援しているタイの奨学生と野中様親子

山梨英和中学校・高等学校様には1989年からご支援いただいています。支援方法は「ウォーカソン」と名付けた強歩大会を2年に1回実施、生徒が親や親戚とスポンサー契約を交わし、走った区間の契約金を寄付するユニークなもので、そのご支援により現在までタイ他3カ国で500名以上の奨学生が学校を卒業できました。

今回は、親子で同校に学び、この夏ご家族でタイの支援地域を訪れた野中由美様、真里様にお話を伺いました

まずは、お母様の由美様に伺います。
ウォーカソンを通じてダルニー奨学金への支援が決まった当時、学校の雰囲気はいかがでしたか？

野中由美様

当時、実はタイのイメージはあまり良くありませんでした。先生方がタイに行って、ぜひ奨学金支援をやるべきだとなり、秋尾理事長も講演されたのですが、「じゃあタイに支援しよう！」という生徒はいましたけど、多くは目的を理解していなかったと思います。

由美様はタイへの研修旅行にも同年ご参加されました。
その時のタイ支援地域の印象はいかがでしたか？

生活の違いがあまりにもショックで、帰国後は必要以外の電気を全部消すなど、家族が心配するほどでした。でも周りの方が良くしてくださったのもあって、「タイってすごく良い国だ！」と。その後もう一度タイ北部へ行ったのですが、そこでもいい出会いがあり、まさに人生が変わる出来事でした。

今回タイに行かれて、現在の印象はいかがでしょうか？

当時以上に、奨学金が必要だと感じます。生活水準は上がったように見えましたが、支援を必要としている子どもたちの経済状況は変わらず、むしろ昔の方が豊かだったように思います。印象的だったのは、今回訪れた学校の先生が「今の子どもたちには夢がない、『どうせ自分の親と同じような将来なんだ』としか思えないんだ」と言っていたことです。

一見豊かに見えるタイでも、まだ支援が必要なことがわかります。由美様は娘の真里様にタイに住む子どもたちの状況や国際協力について、昔から意識してお話されていましたか？

娘の小学校で国際交流の授業があり、そこで先生からタイについて話してほしいと依頼があって、クイズや食べ物を例にタイのいいところを話したことがあります。2021年のウォーカソン前にも私の経験を話すことがあり、そういう機会には話しています。

では、真里様に伺います。昨年夏に自由研究として学校で支援している奨学生とオンラインで話をされましたが、取り組みを決めたきっかけはなんでしたか？

去年、私にとって初めてのウォーカソンで、タイの奨学生のことを知って「これだ！」と思いました。私自身もタイにルーツがあり、深く知りたかったし友達にももっとタイのことを知ってほしくて決めました。

野中真里様

昨年はZoomで、今年は実際に会いに行かれましたが、印象は違いましたか？

Zoomで話した時は、先生方は明るかったけど、生徒さんは今の生活に満足していないように感じました。でも、今年会いに行ったら学校全体で歓迎してくれて、びっくりしました。行くまでは「支援が必要な可哀想な人たち」と思っていたんですけど、実際はそうではなくて、楽しそうに学校に行っていて私と変わらないんだと思いました。

実際に目で見たからこその気づきですね。昨年開催のウォーカソンについて、奨学生と話す前後で行事に対する意識は変わりましたか？

夏休み前から走る練習はしていましたが、はじめは「何のためにやるの？」という感じでした。でも顔を見て話して、「この子たちのために頑張ろう」という気持ちになって、走ることで彼らの生活の辛さを少しでも知ろうと思えました。友達とも小さなことでも人のために頑張っていきたいよねと話すようになりました。

ウォーカソンは30年以上続く伝統行事ですが、長く続く秘訣はなんだと思いますか？

教育方針もあると思いますが、研修に参加した生徒がいることかなと思います。実際に見に行くことで、「参加している」という意識が生まれて、私たちも「あの子たちのために頑張ろう」と思えたり、彼らも「あの人が支援してくれているんだから頑張ろう」と思えたりする関係が大事なのかなと思います。

みんなも奨学生とお話してほしいです。私自身実際に話してみて、ウォーカソンに対する気持ちが「めんどくさい」から「この子のために頑張ろう」に変わったので。オンラインでもいいから話して、今の私みたいにみんなに伝えてもらえれば、続いていくんじゃないかなと思います。その時は私も通訳とかでお手伝いできればなと思いました。

「交流」が大切ですね。最後に、一言ずつお願いします。

これまでの35年、これから先も続けていくには労力、周りの理解以外に時代など様々なことが影響すると思いますが、やはり交流を大切にしてほしいと思います。秋尾理事長がダルニーちゃんと出会ったように、娘にとってのダルニーちゃんは今回会いに行った子で、そうして名前と顔、声がイメージできるような交流があって、色々な人にとってのダルニーちゃんができてくるといいなと。そしてその中の誰かが日本に来られるという道ができれば、先生が言っていた「夢がない」ことに対する希望になるので、そういう支援もこれからあればいいのかなと思います。

つながりが大切なのかなと思います。母もずっとスタッフの方と繋がってきて、それが私に繋がっていて、奨学生と繋がることができたので、そういうことを私自身大切にしていきたいし、大切にしてほしいと思います。

長年ご支援いただいてる支援者様からのメッセージ

民際センター設立35周年に際し、主に34年以上継続してご支援いただいている支援者様を中心にメッセージを頂戴することができましたので、ご紹介いたします。限られた誌面でできるだけたくさんの方々のメッセージを掲載できるよう、メッセージの一部を割愛・編集させていただいている場合がありますことをご了承ください。いただいたご意見は、すべて事務局内で共有させていただいております。お言葉をお寄せくださった皆様に、心より御礼申し上げます。

各メッセージの内容は、次の質問に対応しています。
【1】民際センターとの出会い
【2】思い出に残るできごと
【3】民際センターに期待すること

細野 裕 様　【1】朝日新聞に大きな記事ではありませんが載っていました。若い方、それが秋尾さんでした。給料の一部で子どもの教育が支援できるなら貴重な給料から支援しようと思い立ちました。妻とも相談して！（私たちもそんなに裕福ではなかったのですが）　【2】パーティーがありましたよね。その時、秋尾さんご本人とも会え、話をしました。新聞の記事そのものの感じに安心をしたのを覚えています。【3】広める、続けることが力だと思います。もっと近くに住んでいたらボランティアもしたいとずっと思っておりますが、遠いものですから失礼しております。

田村 幹夫 様　【1】初めてのタイ旅行でタイが好きになったからです。　【2】淡々と毎年来る子どもたちの未来を想像するのが楽しかったですね。特に山も無く谷も無く長い時間が過ぎていたな、というのが実感です。　【3】何もかもが難しい時代になってしまいました。活動を続けていくだけでも大変そうです。頑張ってくださいとだけ申し上げます。

高橋 和市 様　【1】私は1944年生まれ、終戦後東京の墨田区本所に疎開先より帰りました。上野駅に着き上野の山から見た下町は焼け野原で、隅田川の川面がキラキラと光っていたのを今も鮮明に覚えています。東京の食糧事情は最悪で、小学校の給食で初めて美味しくお腹いっぱいの食事でした。後にこの給食はアメリカからの援助で日系アメリカ人が中心だったと知り、私もいつの日か恩返しの援助ができるようになりたいと思いました。40歳頃からユニセフ募金等をしていたところ、朝日新聞で顔の見える援助ダルニー奨学金を知り応募しました。　【2】何人かの奨学生が家庭の事情により退学した時、奨学生の行く末を案じても、何もできない不甲斐なさと無力感で落ち込みました。

＊文中に出てくる「秋尾」は、弊団体理事長を指します。

N様ご夫妻　【1】新聞記事を見て出かけた説明会で秋尾さんのお話を聞き、私自身も奨学金を受けた経験があり、タイの子どもたちに勉学の機会をプレゼントしたいと思いました。当時、過酷な生活環境にいるアジアの子どもたちの様子を伝えるニュースも多く、心を痛めていました。「民際」という初めて聞く言葉にも興味を持ちました。　【2】証書に添付された写真が届くと、「この子に届いたんだな、元気で頑張って欲しい！」と思います。次の年に少し成長した姿を見ると、応援の気持ちと共に幸せな気持ちにもなります。「メコンで生きる子どもたち」のカレンダーを飾っています。彼らの明るい笑顔、真剣なまなざし…きっとより良い世界が開ける！と思わせてくれます。

J.S.様　【1】ダルニー奨学金のことを新聞記事で知りました。前年に２人目の子どもが生まれ、家庭の基盤が固まりつつあった頃でした。私自身が国の奨学金を得て大学を卒業できたこともあり、今度は勉強したいと思っている世の中の子どもたちのために、自分が何かできることはないかと考えておりました。記事には、年1万円の寄付でタイの中学生1人を1年間就学支援できるとあり、これであれば私でもできると思いました。　【2】ダルニー通信の記事で、学校や会社でこの活動に熱心に参加されている方々がたくさんおられることを知り、感銘を受けるとともに、私自身が励まされました。

花野 瑞穂 様　【1】朝日新聞の記事でした。　【2】すみません悲しい思い出ばかりです。支援対象の子の非行、若年結婚、行方不明等。　【3】組織が大きくなり、また公益法人化に伴い機動力が失われてきたように思っています。別途小規模の任意の団体を設立して迅速かつダイナミックに行動できるようになると良いなと思っています。

東矢 高明 様　【1】朝日新聞記事を読んで、就職した年に申し込みしました。　【2】タイ、ラオスで自分が支援している子どもたちやその家族に会って交流できたこと。　【3】村泊できるツアーを再開してほしい。コロナが収束したら自分が支援している子に会いにいきたい。

大慈弥 豊子 様　【1】1986～7年頃だったと思います。当時、主人を脳梗塞で突然亡くし（1985年）、精神的、経済的にも戸惑う日々でした。その頃、朝日新聞で「ダルニーちゃんを助けよう」との記事に衝撃を受け、せめて、中高の学問を助けたい気持ちに、ささやかな支援をとの気持ちから生涯続けようと思いました。　【2】支援した子どもたちの葉書を頂くのは嬉しいことです。できれば卒業後の進路、現在の生活を垣間見たいと思います。　【3】色々ボランティアの案内はありますが、個々の援助を明記することは無く、全体の助けの中に紛れてしまう感じは面白くなく、ダルニー資金のような具体化した案内は、些かながらも援助の一員としての満足感があります。

斎藤 秀男 様　【1】朝日新聞に掲載された記事を知り、年1万円なら私でも寄付できると思い支援を始めました。　【2】タイのイサーン地方へ研修旅行で自分の支援している子どもたちに会うことができたことです。又、学校の先生、村の人々との懇親会大いに盛り上がりました。　【3】民際センターも秋尾代表引退後の体制も考える必要が出てきたと思う。アジアの子どもたちが一人でも多く安心して学校へ行けるよう願っています。

中本 宏子 様　【1】息子が大学生の時始めたのをきっかけに私も始めました。息子の結婚相手も寄付をしておりびっくりしました。92歳になります。これからも続けたいです。

H.K. 様　【1】新聞にダルニー奨学金のことが紹介されているのを見ました。発展途上国への援助で、初等・中等教育の就学が最も有効ではないかと思っていた私はそれで寄付することにしました。　【2】毎年、援助している生徒の写真と身上書が送られてくることです。送金したものが有効に使われていると、手間暇かけて知らせてくれることはとても良いことと感じています。　【3】タイだけでなく、ラオス、カンボジアなど東南アジア一円に援助を広げているのは良いことと思います。

佐藤 はるか 様　【1】新聞の広告を見たのがきっかけだったと思います。　【2】一度だけ、クリスマスカードの返信をもらったことがあります。その時の英語が達筆で、しかも文章能力も自分よりはるかにある…。毎年下手な英語で一言添えていましたが、変な英語を送っていてすみませんと思っていました。　【3】カード決済できるようになって便利になりました。（振込は行ける機会が限られてしまっていたので）

国政 政博 様　【1】朝日新聞朝刊の記事を見て、民際センターへ資料請求をしました。　【2】退職後、少しばかり事務局でボランティアをしたことです。（ダルニー通信43号の“民際ボランティアです”の記事を書きました）　【3】多くの人にこの活動を知ってもらうことでしょうか。

吉山 和宏 様　【1】民際センターの説明会に参加した際に、小学生の頃に友達と百貨店の催事に行き、途中で同級生と離れてしまった時のことを思い出しました。帰りの乗車賃が無く、周囲の人に無心したが借りられず、店員のお姉さんが貸してくれました。名前を聞き忘れ、後日返金しようと百貨店に通ったのですが会えず。代わりに、そのお金は他の有意義なことに使わせてもらったらと思い、民際センターのタイの子どもの教育に使うことにしました。　【2】地方（支部）での集会等で多くの会員の方が同じ考えを持って参加し協力していたこと。現地での奨学生とドナーが面会した時の恥ずかしさと喜び等。（研修会、スタディーツアー）　【3】懇親会等で横のつながりを多くしては。

小池 健一 様、より子 様　【1】35年も経ちましたか…。当時、朝日新聞にダルニー募金の記事が載っていたんです。その頃私は幼い子３人の子育て中で家事に追われ、忙しい専業主婦でした。年間1万円で、タイの子どもが1年間、中学に通えることを知りました。そして、タイの農村地区の生活が、私が幼かった頃の東北の農村のイメージと重なりました。日本が豊かになったように、教育を受ける子が増えればタイも豊かになれる。私が1ヶ月1000円くらいやりくりすれば1人の子が1年も学校に行ける。そう思って始めました。幸い、夫も賛同してくれて、我が家の子ども（3人分）が元気に育っているという感謝の気持ちを形にしたのが、タイの子ども３人を毎年、支援することです。今は1ヶ月1000円という訳にいきませんが、年の功といいますか節約の術が身に付いてきました(笑)。あれからず～っと３人分。何とか続けられています。

N.F.様　【1】明治生まれの両親でしたが「おしゃれは年を取ってからでもできるが勉強は若いうちでなければ」と背中を押してくれました。長く生きているといろいろなことで教育というのは本当に大事だとつくづく思います。日経新聞文化欄に秋尾理事長の活動が紹介されたのを読み、できる限り支援しようと連絡しました。　【2】何年前でしたか、寒い時期、はがきの整理に行っていた時、ダルニーちゃんが事務所にいらしたのでお目にかかることができました。後で娘に「うらやましいなぁ」と言われました。

A.I.様　【1】当時購読していた朝日新聞の記事だったと思います。タイ東北部の子ども１名を年間1万円の学費援助で中学校に通わすことができるとのこと、我が家にも当時同年代の子どもがおり、この程度ならと始めました。

S.A.様　【1】学生時代に個人旅行でアジア諸国や東欧、北アフリカなどを見て回っていましたが、タイのような相対的に豊かな途上国でも中学校に通えない子どもたちがいることを、秋尾晃正さんの記事で知りました。私自身が28歳まで大学院に通っていたことから、教育の大切さを痛感していたので、企業への就職と結婚を機に、そのような子どもたちを少しでも助けられればと思い、毎年3人分の寄付を始めました。当時、年1万円で、中学生が学校に通えるということも驚きでした。　【2】もう25年くらい前ですが、カルチャーセンターにタイ語を習いに行って、つたないタイ語で奨学生に手紙を書いたら、卒業時に丁寧な礼状をもらったことです。読むのに苦労しましたが、気持ちが伝わって嬉しかったですね。

山口ゆき様　【1】長女の中学入学と同時に寄付を始めました。その少し前にダルニー奨学金のことが新聞で紹介されているのを見て、子どもと同じ世代の人々の教育支援をしたいと思ったからです。報告書や生徒の手紙などで、寄付金が確実に届けられていることを確認することができ、信頼感から今まで続けてきました。　【2】20年程前、奨学生のTHEPさんから、父親が亡くなり生活が苦しくなったが勉強を続けたいとの手紙が来ました。民際センター事務局の方に相談し、個人的に支援し、中学を卒業することができました。その後彼女はバンコクで働きながらカレッジを卒業することができました。学ぶことは将来の選択肢を増やすことができると改めて感じました。

山本裕子様　【1】センター設立と同年から、夫の仕事に伴いバンコクに住みました。タイの文化や人情を知り、関係する周囲の人から受ける親切に感激の２年半でしたので、帰国後に新聞記事で団体のことを知り、迷わず寄付を始めました。　【2】タイ語の読み書きができたので、手紙文などのボランティアをさせて貰っていました。ドナーさんご逝去に際しての生徒さんたちからお悔やみの手紙＝手作りカードに文章入り＝を翻訳したことがありました。それぞれの言葉でかつ丁寧な哀悼文でした。これは多分、中学校の先生が書くよう指導したのだと思われます。奨学金を受け配り配分するだけなく相手国側を思いやり、マナーも学習させる、タイ側の先生の努力にも感心させられた出来事でした。

進士和雄様　【1】新聞を見て知り、世の中の役に立つことを何もしていないなと思い、始めたのがきっかけです。　【3】期待することは特にありませんが、自分の善意を形にしてもらっているので逆に感謝しています。

H.H.様　【1】1980年代、仕事でタイを訪れたことがありました。微笑みの国に相応しい人々の笑顔や礼儀正しさに心癒された。半面、心を痛める光景も目にした。交差点で車が止まると子どもたちが渋滞する車に群がり、身を危険にさらしつつ新聞や花を売り歩くのである。この光景には本当に心を痛めた。数年後、新聞でダルニー奨学資金援助の存在を知り、私もあの子どもたちを救えるのは教育しかないとの思いもあり、一も二もなくこれに応募することにした。　【2】奨学金受給生の写真が送られてくる度に、子どもたちの真摯な姿勢に感銘を受けている。これ等の国々には未来があると確信している。

K.K.様　【1】確か新聞かと思います。学校に行けない子がいると知り、たいした額でもない金額で支援できるのであればと思いました。　【2】雪を知らない子が、私のためにマフラーを送ってくれたことです。【3】ずっとこのまま長く続けてください。

細川俊彦様　【1】勤務期間中に、米国留学の機会を与えられたので、これに報いるべく、いつの日か、アジアの国の子どもたちの教育支援をしたいと考えていました。折しも新聞紙上で、民際センターの活動を知り、意を得たりとの思いから、寄付を始めることになりました。　【2】多くの児童が、まずは中学校に進学できるようにと、細々と長く寄付をしてきましたが、そのうち１名（女子）が大学教育まで進み、バンコク市の銀行に就職し、その頃知り合った米国人男性と結婚しました。米国で生活しているとの便りをもらったのを最後に音信は途絶えましたが、いつの日か、母国の児童を支援する側になってくれれば、望外の喜びです。

玉井信子様　【1】新聞の記事を見て、年間1万円で卒業ができることを知りすぐ申し込みさせていただきました。　【2】15周年記念事業の時、奨学生の二人を招いて頂き、その時のお一人、トーウィレヤーさんが私の支援者でした。初めてお会いし、涙が止まりませんでした。しばらく交流していたのですが、今はしていません。　【3】いつもダルニー通信を送って頂いて有難うございます。ますます広がりをみせて、素晴らしいことですネ。秋尾理事長も80才、私も76才になってしまいました。たった一人の援助で申し訳ありませんが、長く続けたいとは思っております。

トンチャイ博士からのメッセージ

EDF-Thai（タイ事業所）の理事であり、民際センターが長年教育的観点からご助言をいただいているトンチャイ博士からのメッセージをお届けします。

1997年、タイ教育省科学技術教育振興研究所の所長に就任したばかりの頃、一人の日本人、秋尾晃正氏とお会いできたことを光栄に思っています。共通の話題で何度かやりとりした後、私は彼とずっと長い付き合いをしてきたような特別なものを感じました。同じ興味と情熱を共有していたからです。不利な立場が教育の欠如をもたらし、教育の欠如が貧困を招き、貧困がさらなる不利な立場をもたらすという「負の連鎖」を断ち切るための最も重要なツールが教育であると私たちは考えていたのです。

秋尾氏は地域開発教育基金（EDF）の創設者であり、現在理事長であります。EDFが1987年に設立されるまでの話を聞いて、私はすっかり感心しました。その後、タイ事業所の理事として招かれました。

現在までに、40万人以上のタイの恵まれない学生にダルニー奨学金が提供されています。もしEDFがなかったら、これらの学生は学校を中途退学し、「負の連鎖」の犠牲者のままだったことでしょう。しかし、奨学金によって、彼らは教育を受けることができ、今ではよいキャリアを得て歩むことができています。

以前、元奨学生たちが、奨学金がいかに彼らに希望を与え、人生を変えたかという話を涙ながらに語るのを聞いたことがあります。奨学金は個人の人生だけでなく、家族の人生も変えるものだと私は非常にその時感じました。

また、教育格差の是正を目的に、タイ事業所が独自に学校と連携して実施する開発プロジェクト「所得改善・キャリア開発プロジェクト」「ランチプロジェクト」「健康促進プロジェクト」も特に印象的です。2021年だけでも、349校と協力し、68,899人の生徒が恩恵を受けています。これらの生徒たちは、より質の高い生活と良い教育を受け、進学の道が開かれています。奨学金や開発プロジェクトが、すでに何千何万という生徒の負の連鎖を緩和し、あるいは断ち切ったことを、私は誇りに思っています。

EDFの活動費は、全て支援者様からいただいたものです。恵まれない生徒を代表して申し上げますが、支援者の皆様には、言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持ちでいっぱいです。EDFを信じご支援くださった皆様、皆様のご支援が若者たちの力となっています。ありがとうございます。

トンチャイ・チェウプレチャ博士
（Dr. Thongchai Chewprecha）
1942年生まれ。タイで初の理数科高校、マヒドン ウィッタヤヌソーン スクールで校長を経て、韓国、アメリカ、シンガポール、中国、ドイツ、イスラエル、インドなど、世界有数の科学高校と提携し、タイの科学教育の普及に努める。プリンセスチュラポーン・サイエンスハイスクール12校で、科学学習の特別カリキュラムの開発に携わる。タイ教育省科学技術教育推進研究所を創設、所長として長年従事。理数系の基礎人材の育成に努めた。退任後、EDF-Thaiの理事に就任。タイ王冠勲章はじめ、多くの勲章の授与歴あり。

1 「マイ・ページ」をご利用ください

マイ・ページは、支援者様と奨学生、そして民際センターとのコミュニケーションを劇的に向上させるためのツールです。こ利用いただくことで、今までメールやお電話にて都度ご依頼をいただいていた支援者様の住所、電話番号、領収書発行先などのご登録情報の変更が、ご自身で可能になります。

また、年に2回のEDFグループからの郵送物でしか確認することができなかった支援履歴、支援状況表、奨学生写真等を、PC又はスマートフォン、タブレットから確認することができます。未登録の方は是非とも、ご活用ください。

◎ご登録方法について
www.minsai.org/oshirase/mypage

2 ボランティア募集中

民際センターの活動は、多くのボランティアに支えられています。募集内容は、書類封入、切手整理、データ入力、翻訳、広報資料作成等のボランティア活動があります。活動場所は、民際センター事務局やご自宅など、活動内容によって異なります。

現在、アドビ・イラストレーターを用いて広報資料（チラシやパンフレット）をデザインしていただく方や、動画編集ができる方が必要です。基本的に在宅での作業となります。こ興味のある方は、民際センターのホームページをご覧ください。（https://www.minsai.org/volunteer）

3 民際センターを紹介してください

皆様のブログ、SNS、ホームページなどで民際センターを紹介してください。ロゴや写真、記事の提供などは事務局へご依頼ください。

4 「支援者の声」を募集しています

皆様の声を民際センターのホームページ「支援者の声(www.minsai.org/activity/voice)」やダルニー通信などでご紹介させてください。ご支援された経緯、奨学生とのエピソードなど、文章、動画、何でも結構です。事務局までお寄せください。

事務局 Q & A

Q 忘れずに支援するためにはどのような方法がありますか？

A クレジットカードによる寄付にて自動継続による引き落としをご選択ください。

Q 友人が「ダルニー奨学金の寄付を始めてみたい」と言っています。詳しい説明を聞くことができますか？

A お電話やメールでお問い合わせください。また、事前にご連絡をいただけましたら、オンライン会議システムなどにより職員が直接ご説明いたします。

Q 終活を一緒に考えてくれますか？

A 相続による寄付、遺言書の書き方などの遺贈について、ご支援者様のご要望をお聞きしながら、専門家を交え一緒に考えさせていただきます。遺贈寄付のお悩み、ご質問にワンストップでお答えします。是非ご相談ください。

Q コロナが終息した後、支援している奨学生に会いに行くことはできますか？

A 基本的に可能ですが、各国の状況によります。訪問される場合は、必ず事前に民際センターにご連絡ください。現地事業所から各国の政府機関に申請し、許可が必要な場合があります。

Q 民際センターは、メコン5ヶ国を支援していますが、どこの国を支援して良いのかわかりません。どの国が一番支援を必要としていますか？

A 民際センターが支援しているメコン5ヶ国の農村地域などはいずれも貧しく支援を必要としています。毎年の支援状況により国毎に不足の程度が変わりますので、その都度お問い合わせください。もしくは、ご支援の際に「一番支援が必要な国」とご明記ください。

【編集後記】 入職してすぐにコロナ禍となり、ずっと海外出張には行けずにいましたが、8月下旬に満を持してタイに行くことができました。奨学金を受け立派に育ち、成人した元奨学生と初めて会うことができましたが、奨学金が彼らの人生に確かに良い影響をもたらしたことが分かり、感動しました。バンコクは以前私が訪れた5年前よりもさらに都会になっていて、何でも手に入る豊かな都市と感じましたが、ガソリンの高騰は思った以上に著しく、今や日本よりも高いと聞き驚きました。貧富の差がより激しくなっており、そのしわ寄せは貧しい家庭の子どもたちを直撃することが容易に想像でき、そんな子どもたちのためにできることをしっかり知恵を絞って考えていかなければと思わされました。（米）

活動をご覧いただけます
- フェイスブック：facebook.com/minsai.org
- ツイッター：twitter.com/minsaiorg
- インスタグラム：instagram.com/edf_japan

郵便振替でのご支援はこちらからお願いします

ゆうちょ銀行振替口座：00160-7-664928

◀ 表紙の写真 …笑顔を向けるラオスの子どもたち

▶「ダルニー」とは…
民際センターが奨学金を募り1対1の教育支援を始めるきっかけとなったタイの女の子の名前。

*EDF：The Education for Development Foundation、民際センターを含む各国事業所の総称名

このダルニー通信は2022 年10月に編集されました。

ダルニー通信91号　2022年12月1日発行　発行人：秋尾晃正

公益財団法人　民際センター
〒103-0023　東京都中央区日本橋本町2-6-13 山三ビル7F
TEL：03-6457-5782　　FAX：03-6457-5783
Eメール：info@minsai.org　ホームページ：www.minsai.org

公益財団法人
民際センター